

今週は、曹洞宗の大本山總持寺をお開きになられた瑩山禪師が説き示された『伝光録』についてお話いたします。

『伝光録』とは、伝えられた光の記録と書きます。

『伝光録』は瑩山禪師が石川県にある大乘寺において、集まった修行者に説いた教えを、弟子たちが記録編集し、今に伝わる著述です。

また、大本山永平寺をお開きになられた道元禪師の著された『正法眼蔵』と同じように、曹洞宗の根本聖典として大切にされております。

『伝光録』は五十三章から成り立っており、ひとつひとつの章ごとにお釈迦さまから歴代の祖師方について、お一人お一人の伝記や教え、そして各祖師への瑩山禪師の思いが記されています。

お釈迦さまからはじまり、お釈迦さまから教えを受け継いだ摩訶迦葉尊者と続き、以下、インド歴代祖師、第二十八祖菩提達磨尊者、そして日本曹洞宗に連なる中国歴代の二十二人の祖師、さらに日本に正しい教えを伝えた永平寺開山道元禪師、そして道元禪師の教えを受け継いだ永平寺二代目の孤雲懷弇禪師の章で締めくくられております。

『伝光録』とは、伝えられた光の記録です。「光」とはお釈迦さまから代々の祖師方へ伝えられた正しい教えのことを指しています。

教えを伝えるわけですから、そこには教えを授ける師匠と受ける弟子が必ず存在します。この両者がさまざまな機縁によって出会い、教えを伝えることによって一体となっていく様子が生き活きと表現されております。

瑩山禪師は出家得度の師匠である懷弇禪師からいただいた教えを通して、実際にはお会いすることのできなかつた道元禪師や歴代の祖師、そしてお釈迦さまにいたるまでの強いつながりをお伝えしています。

たとえ生きて出会うことのできなかつた方でさえ、教えを通してお会いすることができる、学ぶことができる、とお示しになられているのです。

人の生命には必ず終わりがあります。しかし、人から人へと強い結びつきによって伝えられた正しい教えは、今もなお光り輝いているのです。